

通して私が得たものは、又先生方が私達に与え得るものが、知識だけではなかつた事を感謝しています。

△万葉集における憶良の位置△

——憶良の歌人的性格とその特異性——

第二回卒業 野尻 真理子

(旧姓 定形)

学園を卒業してから、二年と七ヶ月が過ぎ、すでに一児の母として、0歳の娘を中心としたリズムで毎日を送ってきた。そこに突然、「卒業論文の思い出」という原稿を依頼され、何か、遠い昔のことのように、なつかしく学生時代がよみ返ってくる。

「卒業論文」。それは私にとって、四年間の大学生活での、最後の情熱を結集したもののように思える。できあがったものは、本当に未熟なものではあるが、何回かの壁に直面しながらも、自分のこの筆で文章を作りあげていくという大変な作業ができたのも、たくさんの自由な時間が与えられている大学生活であったからではないだろうか。

そういう意味で、とかく惰性で過してしまいがちな学生生活を、この卒論によって、緊張感と充実感が味わえたような気がする。

ゼミは万葉集で、卒論のテーマは「山上憶良」であった。三年と四年の二回のゼミ旅行で、大和のあぜ道をてくてくと歩きながら、私は思わずにはいられなかった。こんななのどかな、しかも壮大な大和を舞台に、美しい数々の歌を詠んだ人達は、いったいどのような人格であつたのだろうか。

そして、中でも特に、人間的な暖かき、人間くさき感じがられ

た、山上憶良という人を、彼の作品から、私なりに想像してみたのである。

「山上憶良」という人物を書いた、立派な書物が多くある中で、如何に私の憶良を描き出そうかと、ずいぶん苦しんだ。しかし、結果的には、新しい憶良像を描き出すには、余りにも勉強が足りなかつたし、時間も十分ではなかつたのだが……。

四千五百首の膨大な歌の中でも、学生時代には、そのほんの一部をかじつたに過ぎない。何十年か後、自由な時間がもてる時がきたら、再びなつかしい大和を散策し、万葉の歌をひもときたい。これが、私の夢でもある。そうできたら、今度は私の人生にも、緊張感と充実感を与えてくれるかもしれない。

△『源氏物語』における紙と書△

第二回卒業 中沢 尚

卒業してから三年、在学中は伊藤先生のゼミナルで楽しく学園生活をおくらせていただきました。先生に「私は卒論を書くためのみに大学に入ったのではありません」と申しあげたりして、本当は力無くして書けなぬのをカバーしたものの、四苦八苦。出来あがり一〇八枚、題名は「源氏物語における紙と書」という論文であつた。先生は「昔より縁起の良い枚数だ」と一〇八枚の枚数をまず誉めて下さり、質疑応答では「すっきりした論文で」とおっしゃつたの思い返せば、やはり私の浅い勉強を見抜かれていたのでしよう。

源氏物語の中には、いろいろな紙の種類、その紙の出所、つくり